026-Te147z
*00464599 *

善本寫眞集十一

お伽草子

天理圖書館

026
Te147z

帝国図書館蔵

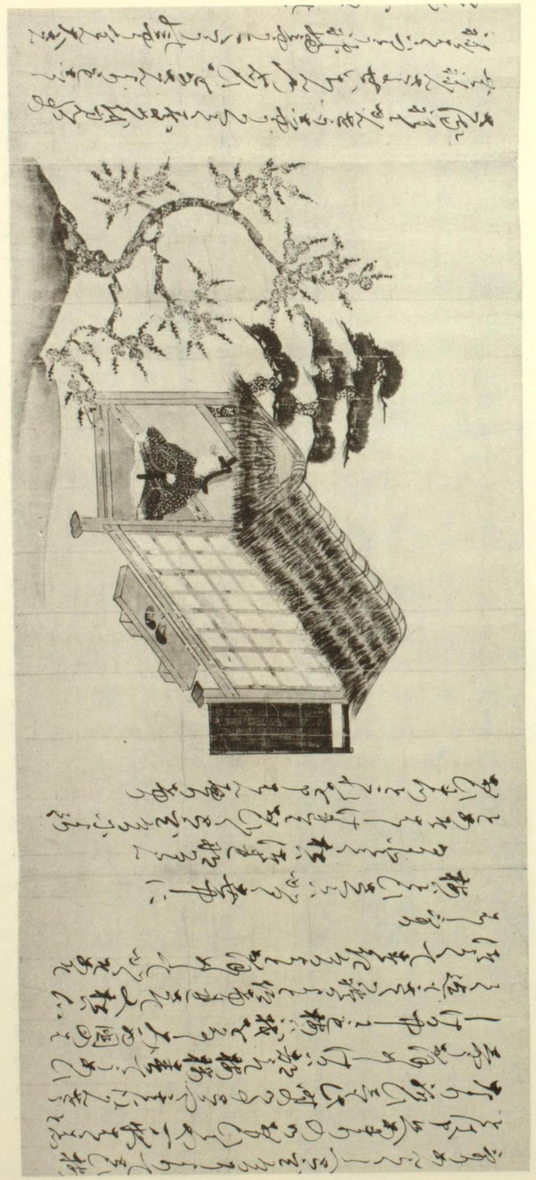
お伽草子は、その享受者を低教養層に豫定し、又はかかる擬態を假る所に總てがある。愛すべき稚拙さ、更に時世粧につれ十分庶民的で、前代の物の哀れ的世界からは凡そ遠い。卷冊とも繪をともなふを例とし、その内繪入冊子を奈良繪本といふ。挿繪の歴史にも多く新機軸を拓き、畫趣もまことにお伽的である。本集は館藏中より十五點を選んでその諸相を示さうとするものである。

国立国会
33.8.-2
図書館

464599

目次

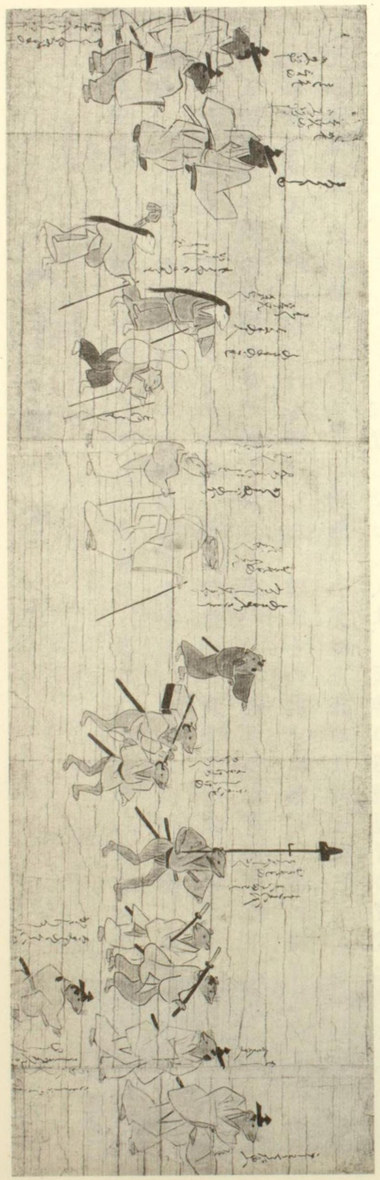
一 天神繪卷
二 鼠草子
三 小男草子
四 岩屋草子
五 花鳥風月物語
六 靜
七 目連草子
八 彌兵衛鼠
九 日高川
一〇 小伏見
一一 熊野本地
一二 御伽草子
一三 壺の碑
一四 寶月童子
一五 横笛瀧口草子

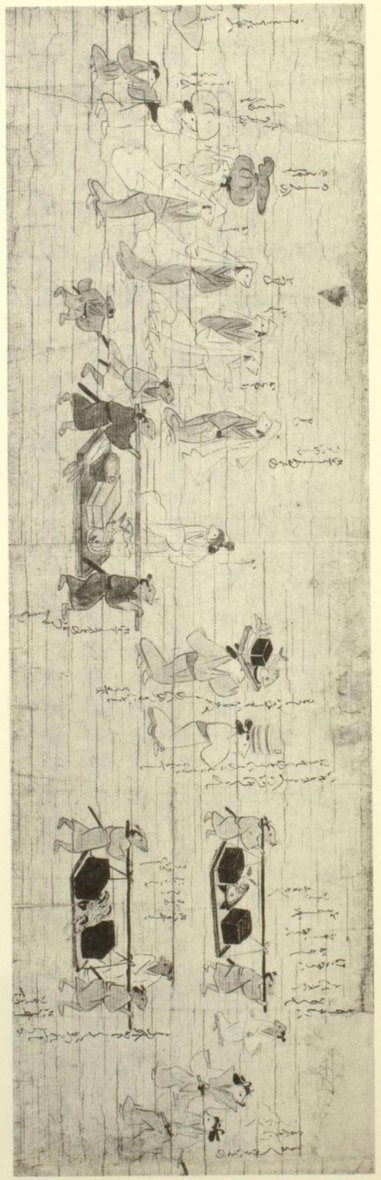


一天神繪巻

延喜の帝の寵臣であつた菅原道眞は、右大臣藤原時平の讒奏により、九州太宰府に流されたが、寃を證かすため荒人神と化して都にかへり、雷神となつて時平をうち殺し、やがて北野社に鎭つて天神に祀られる―飛梅追松の事、法性房との法力較べ等天神縁起中の主な話柄は概ね盡くされてゐる。天神説話の起源は既に古く、縁起繪卷等も鎌倉時代のものが遺つてはゐる。但し、例へば連歌に堪能だつた道眞を説き、北野社に毎日の連歌を法樂するといつた記事は、本繪卷が連歌と天神信仰が習合した室町期の成立であることを示す。

縦四〇糎、横六三糎、三一枚繼、全長一二米四七糎の室町中期繪卷物。繪様は概ね奈良繪的ではあるが、内裏炎上の火焔等にまま式正な繪卷の遺趣が見られ、文章は地の文、繪柄の説明、及び人物の臺詞の三つより成る。寫眞は梅はとび櫻はかるる世の中に何とて松はつれなかるらんと吟じつつ太宰府に住み佗びる道眞。

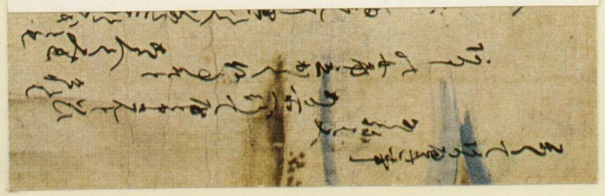




二　鼠の草子

實は繪卷物で、草子とあるのは通名によつたまでで、幾系統かある鼠の戀物語の一つ。鼠の權ノ守は美しい姫君と結婚、やがて姫のお產といつた筋―三々九度の盃、南都酒の用意に雁白鳥の庖丁、鯛の燒物、飯の盛り付け、茶の立て前等賑やかな臺所、續いて長々と續く御輿入の行列、更に粉摺りからはじまる祝の餅つき、そして姫君のお產風景等が繪卷中の見所である。これ等場面の山々は、夫々が別個にまとまつた構成を持つてその委細を盡しながら、しかも全體としての統一につながるといつたお伽草子的世界の好もしさを失はない。

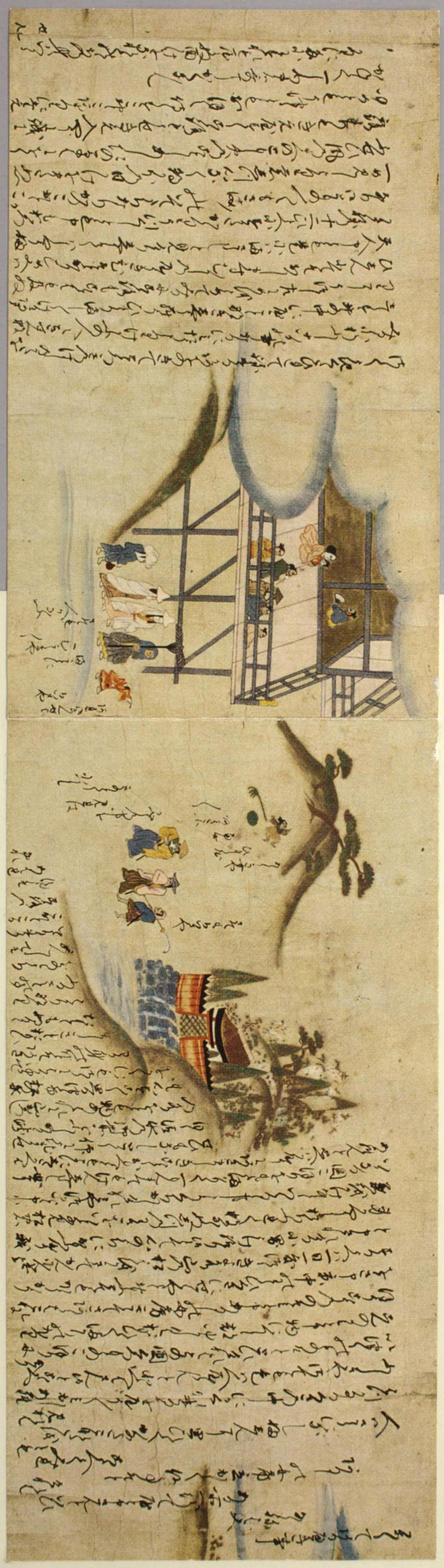
縱三八糎、橫五九糎、一七枚繼、全長八米四七糎の繪卷物。畫中人物に煙管の添描あるを以て、作は室町末期を溯り得ない。卷は專ら繪と臺詞によつて進められ、むしろ繪主文從と見るべきであらう。寫眞は宰領やお女中衆、又は座頭、幸若、猿樂太夫等の諸藝能者達の限りを從へた嫁入の行列。かく物の數を盡くし、且つ寫實的な風俗描寫といふ點もお伽草子的遊びの一つで、頗る連續感にもすぐれてゐる。



三　小男草子

小男草子には、主人公をとし久とするもの、及びひき人の二系統あり、これはその前者で、ひき人の話は後の一寸法師につながる。とし久は山城國くろもと郡しき村の生れ、丈は一尺、横八寸の小男。都は清水寺の裏山で松葉搔きを業としてゐたが、ふと清水寺下向の上臈を見て戀となり、苦心の末姫君の女房周防の手引により、數々の歌を詠んでは心のたけを通はした。姫はその歌才に感じ、遂に妹背の契を結んで子孫繁昌、終りめでたし〳〵の物語。小男は五條の天神と現じ、女君は聖觀音と化したとあり、この草子を御覽じたらん人は、天神の名號觀音の寶號を御となへあるべしと一篇の最後を結んでゐる。

縱四四糎、横六二糎、一六枚繼、全長八米五〇糎の室町末期繪卷物。文は地の文、臺詞よりなる。寫眞は松葉搔の主人公、清水寺參詣の姫君。熊手を枕に、世をすねた小男の姿態も、着想頗る放膽である。小男詞「あらうき世や。ひもじや。南無阿みだぶ〳〵」姫君達「あれ御らんぜよ。ちいさや」「まことにむごらしや〳〵」「さても人かなふ」參詣人「さてもちいさや」「かやうの事を見ればきのどくにて候」



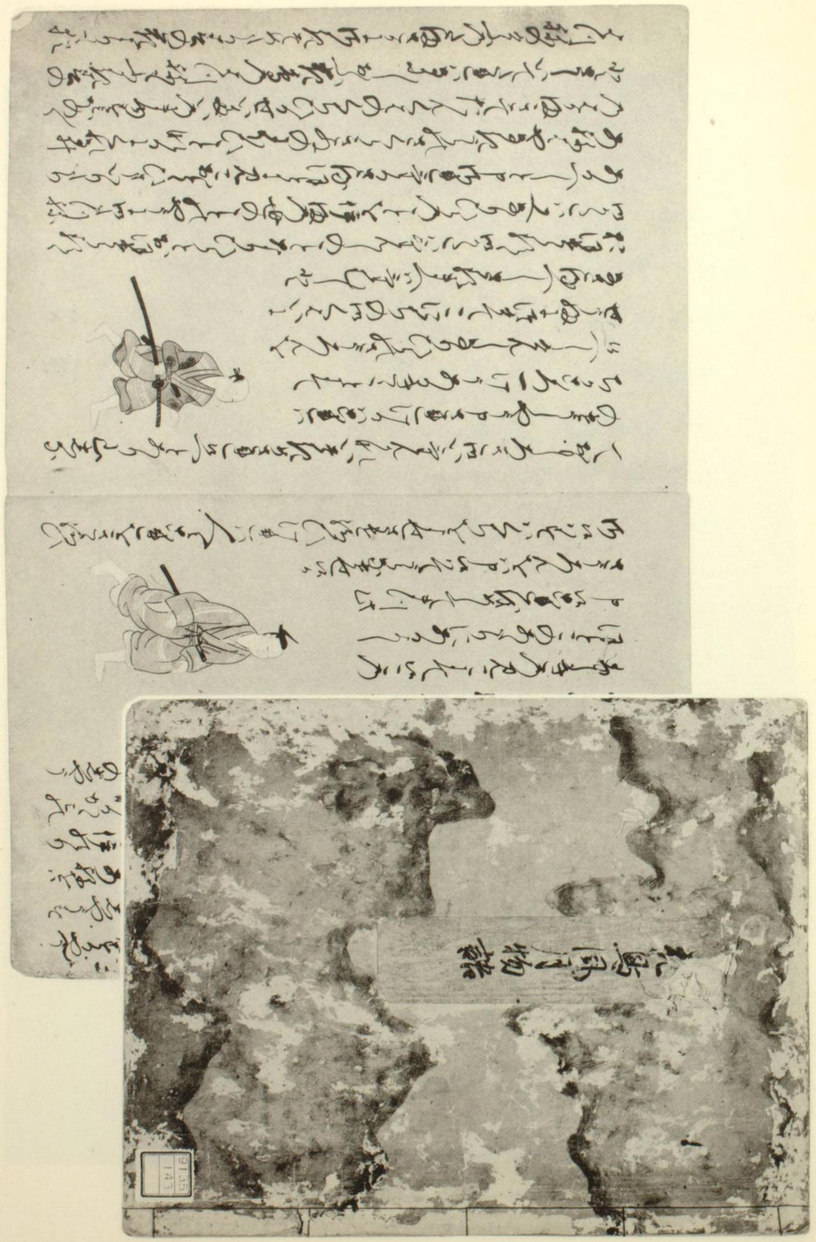
で子孫繁昌、終りめでたし〳〵の物語。小男は五條の天神と現じ、女君は聖觀音と化したとあり、この草子を御覽じたらん人は、天神の名號觀音の寶號を御となへあるべしと一篇の最後を結んでゐる。

縱四四糎、横六二糎、一六枚繼、全長八米五〇糎の室町末期繪卷物。文は地の文、臺詞よりなる。寫眞は松葉掻の主人公、清水寺參詣の姫君。熊手を枕に、世をすねた小男の姿態も、着想頗る放膽である。小男詞「あらうき世や。ひもじや。南無阿みだぶ〳〵」姫君達「あれ御らんぜよ。ちいさや」「まことにむごらしや〳〵」「さても人かなふ」參詣人「さてもちいさや」「かやうの事を見ればきのどくにて候」

四　岩屋草子

古物語的構成をもつ、お伽草子が好んで材にとつた繼母物語。對屋ノ姫君は、父大納言と太宰府に下る船中、繼母に明石の海に沈められたが、不思議の命を助かり、浦の海人夫婦に養はれて濱の岩屋に住まふ。折から伊豫の療治より歸洛中の二位中將に見出されて都に上り、互にかはらぬ契を結ぶ。後、父帥大納言は姫君にめぐりあひ、すべての事情を知つて繼母を離縁し、繼母は罪の報で狂死する。一方、海人は明石の目代職を授けられ、中將は大將に—すべてが幸福に終つた。

縦三二糎、横二五糎、奈良繪本、二册。本文を紹九筆との極札は正當に近く、とすれば室町末期の出來である。寫眞は姫を手離さぬ海人夫婦を松に縛り（右）岩屋に忍び（左上）下司をして姫を奪ふ二位中將（左）の見開き三場面。圖中に文字が混入する大型本は奈良繪本の古態。カットは上卷表紙見返しの飾り繪。



五　花鳥風月物語

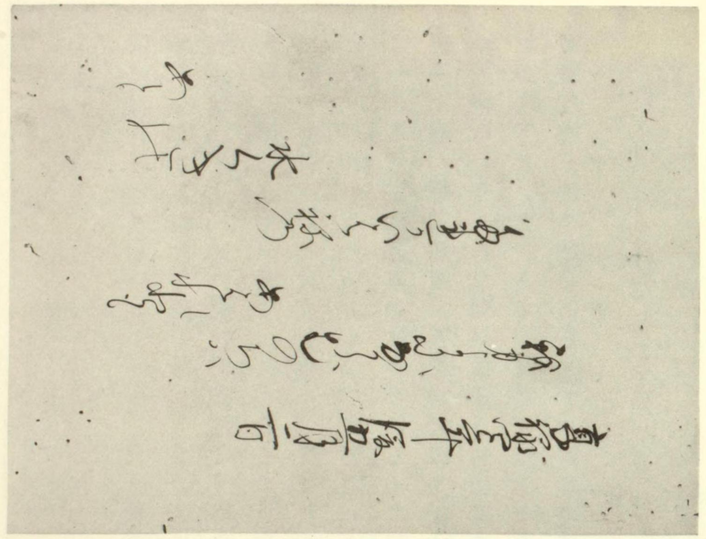
萩原院の御時、葉室中納言の邸で、梅は散り櫻は遅き春雨の徒然に、扇合せの催しがあつた。山科少將の出した男女の扇繪を、或は業平といひ、光源氏と爭つてなかなか定まらぬ。そこで、出羽羽黑の巫女花鳥風月の姉妹をよび、繪の謎を解かせる事になつた。早や招かれて姉妹は、座に三尺の鏡を立て―花鳥、祈るとみるみる源氏映り出で、口付もそのままに、ありし世の身の上語り。風月次いで祈れば、鏡に末摘花の幽靈袞姿に現はれ、戀のうらみをかきロ説いたが、やがて何も心の迷と懺悔して、花鳥風月を緣に菩提の道に入つた。かくて扇の繪は解け、一座の公達衆は、二人の巫女に小袖十襲砂金十兩をかづけたのであつた。

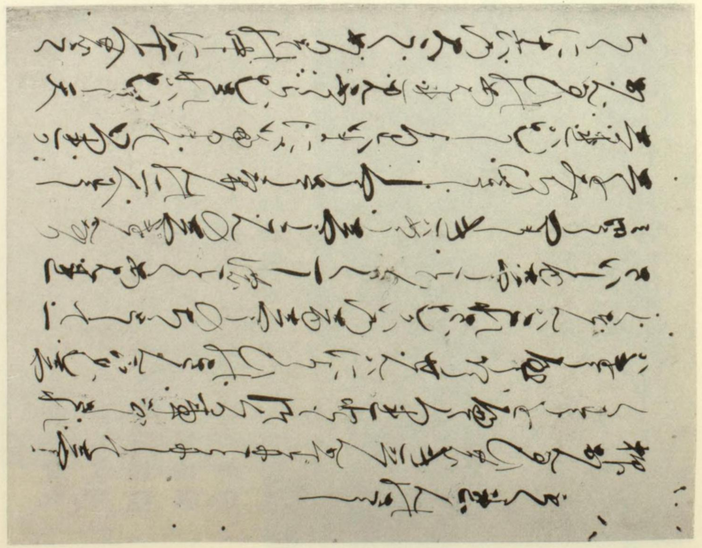
縱三二糎、横二五糎、奈良繪本、一冊。雲紙表紙、金紙の題簽。古筆は筆者を飛鳥井雅俊（大永三年一五二三六二歳歿）、繪を土佐光信と鑑定するが、書格甚だ高逸で、本書をもて遊んだ人の階層を暗示するが如くである。寫眞の繪は巫女を招きに急ぐ侍。

六　靜

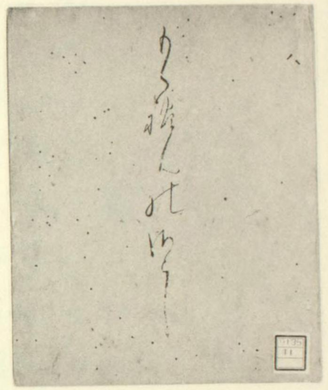
母礒前司の婢女阿古屋の訴人により、靜は梶原に召し捕られて鎌倉に下つた。が、美しい女性の薄倖は世の同情をひく。鎌倉中大名高家の女房達は、靜のために溫い思ひやりを惜しまなかつた。賴朝の北の方政子から舞を所望され、若宮八幡杉廊の舞臺に、うち衣の袖ひきつくろひ、袴の緒さしはさんで舞ひ出でた義經の愛妾靜―かたちは日本一なり、聲は迦陵頻迦、やんや賞め詞の裡にやがて入舞となり、しづや靜の悲歌は流石に滿座の紅涙をさそつた。舞の引出物はすべて義經・若子の冥福にもと鎌倉中の神佛に供養し、靜母子は淋しく都への旅に上る。

縱三四糎、橫二五糎、奈良繪本、一册。此の種のものとしては最も大形で、慶長―寬永の書寫であらうか。玉の樣な阿兒―なまじ判官殿の世繼なるが故に、梶原のため由井ガ濱邊の荒岩になげ殺される。寫眞は馬上に子供を奪ひ行く梶原と、追ひすがる狂亂の靜母子。



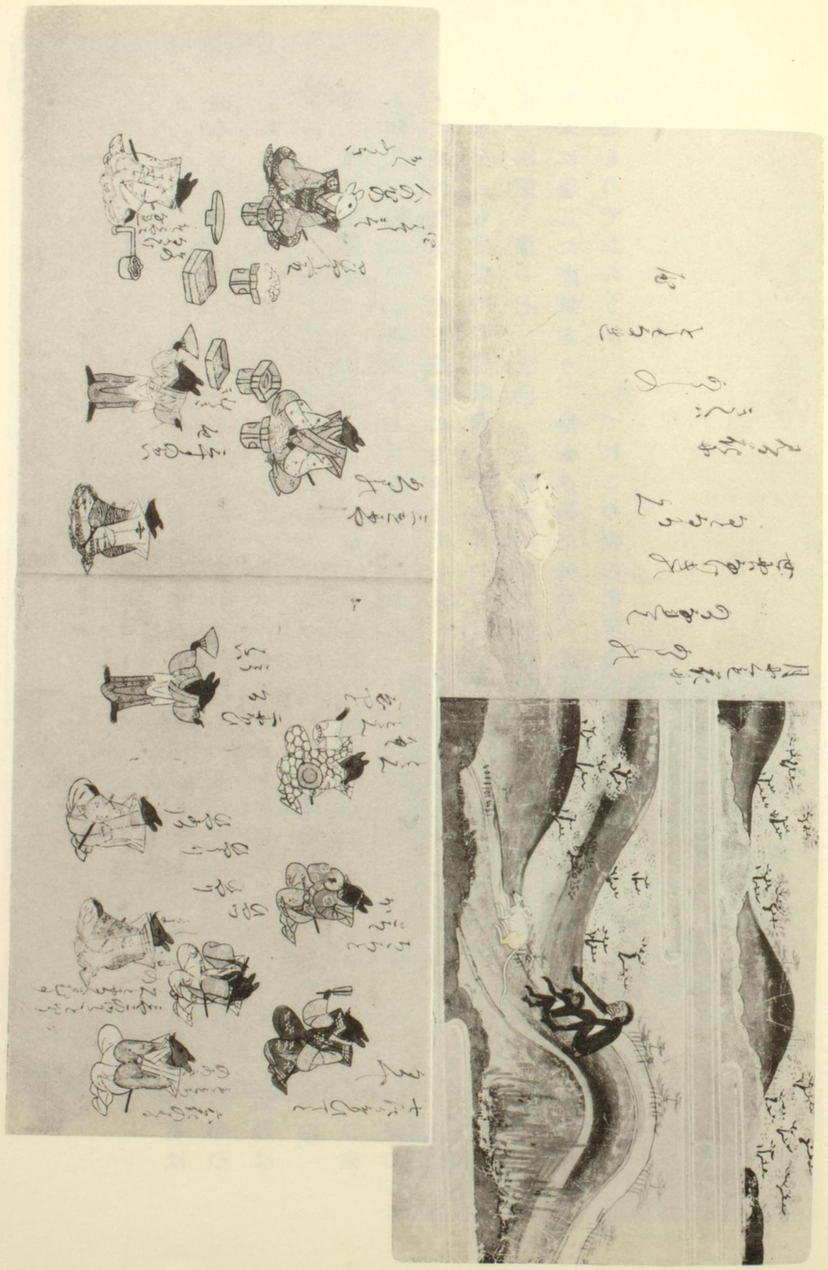


七目連草子



佛弟子中、神通第一の目連尊者は、説法中、紫雲たなびき異香薫じたかと思ふと俄に息絶えた。日毎亡者を責めはたる事の罪業の恐しさに、閻魔十王が尊者を請じてその説法を求めたからである。五歳の時に死別れた母の亡靈に逢ふ事をやがて許された目連の目にしたものは―驕慢の罪により黒焦地獄の釜の中に浮き沈みする母の姿。紅焔の中から、母の聲として、この苦患をのがれるには、法華經の一字一跡を寫し、阿含經を―獄卒は情なくも母の詞の最後迄續くを許さなかつた。一七日を經て蘇生した目連は、七月十五日、萬燈會を催して母夫人の出離生死頓生菩提を祈つた。以上盂蘭盆經に基く、印度・中國傳來の説話たるはいふまでもない。

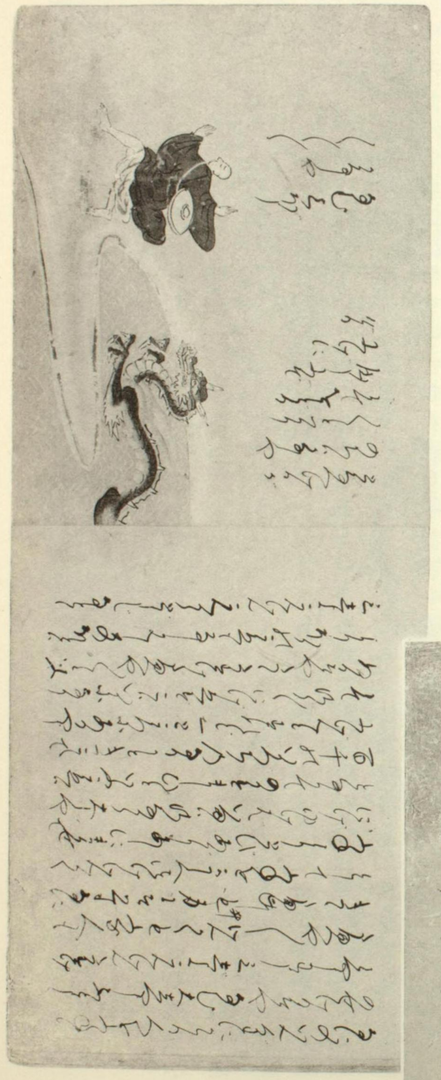
縱二五糎、横二〇・五糎、袋綴、一冊。古筆の極札に邦輔卿筆とあり、邦輔は伏見院（永祿六年一五六三五一歳歿）、本書奥書の享祿四年はその十九歳にあたる。



464599

八　彌兵衛鼠

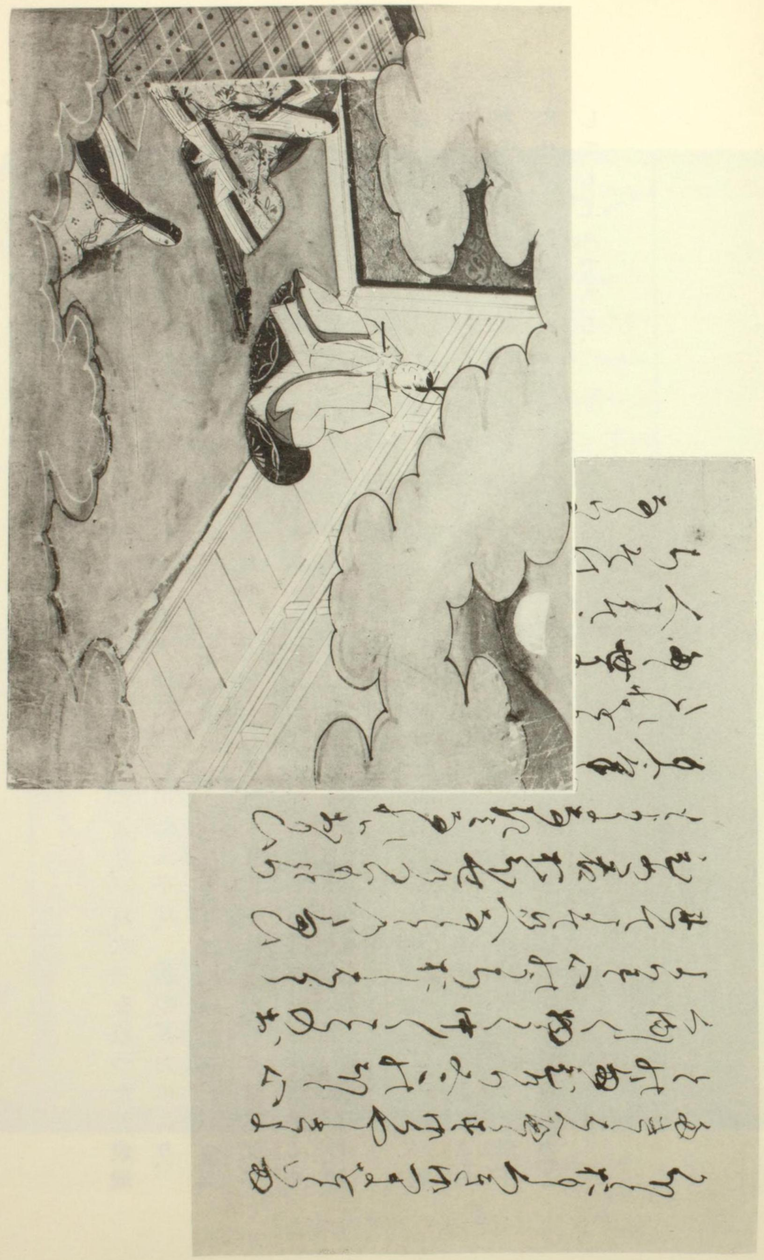
鼠の報恩譚とでもいへようか。大黒殿の使者の、特に白鼠は福の神の中での神通力あるものであつた。都を離れ、東の國にあこがれ出た白鼠の彌兵衛（やひやうゑ）は、流石に故郷戀しく、山を下り、麓の正直左衞門殿の天井に辿りつく。程經て、左衞門に連れられ都に歸つた彌兵衛は、久々妻子に再會するのであるが、親切な左衞門への御禮返しに、白銀の盃に黃金を盛り、更に數あるわが子の中の三郎殿をその養子につかはした。それからといふもの、左衞門いよ〳〵富貴になり、彌兵衛もます〳〵末繁昌―かかる目出度き草子は春のはじめに見る事だ―まことに結構な緣起づくめの話。縱一七糎、橫二四糎、近世初期奈良繪本、一册。寫眞は常盤の國をぬけ出し、知らぬ山路に行きくれた彌兵衛が、親切者の猿姫に里への道を敎えられ、嬉び勇んで山をかけ下り（上）さて彌兵衛を迎えた左衞門方の鼠共が、恥ある都人を慰めようと遊君紅梅・紫に酌をとらせつつ袴袿姿での馳走ぶり（下）。



九　日高川

話の骨子は紀州道成寺縁起の物語として既に有名ではあるが、この主人公達の名は例の安珍清姫でない。一夜泊りに、宿の娘松風とわりなき仲になつた近江三井寺の行脚僧けんがくは、修行の身の上を考へ、慕ひよる女を心強くもふり切り、熊野は那智の瀧に打たれて煩悩を断たうとするが、姫の幻は影の如く、拂へども去らぬ。遂に那智を逃れて、日高川の渡を越さうとした時、うらめる聲もおそろしく追ひ來る姫は一川に飛び入つたと見る〳〵妄執の一念に蛇體と化して。辛くも寺の撞鐘の下に隠れたが、忽ち蛇體に卷き込められ、さしもの鐘もまた忽ち湯水と融け、蛇は男もろとも日高川の川底深く沈んでいつた。

縦二四糎、横一七・五糎、近世初期奈良繪本、一冊。文字の筆致にこの期この種の諸本に通じた匠氣あり、繪も亦甚だ簡勁、或は賣本として書肆の手によつて量産されたものであらうか、いづれこの頃の新現象と考へられる。



10 小伏見物語

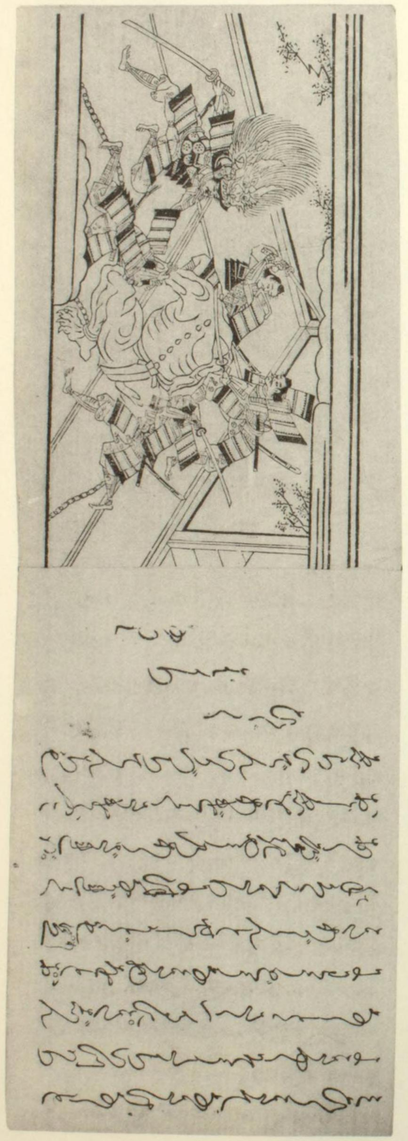
これも親なき姫の物語。桂大納言の御子隆通の中將は、故伏見中納言の孤兒小伏見の姫君とひそかに契り、子さへなす仲であつた。所が父大納言は德大寺殿に請はれ、中將をその聟に許してしまふが、小伏見をいとしく思ふ中將の足は德大寺姫から遠のく許り。そこで父大納言は、小伏見を人知れず難波の浦にたばかり移してしまつた。中將は神佛を賴りに天王寺住吉と姫を尋ねたが、積る憂さに既に姫はこの世の人でなかつた。中將は無常を感じ佛の道に入る。父大納言もこの事を知つて髮を下ろし、北の方、德大寺の姫君達もみな誠の道に入つたとか。

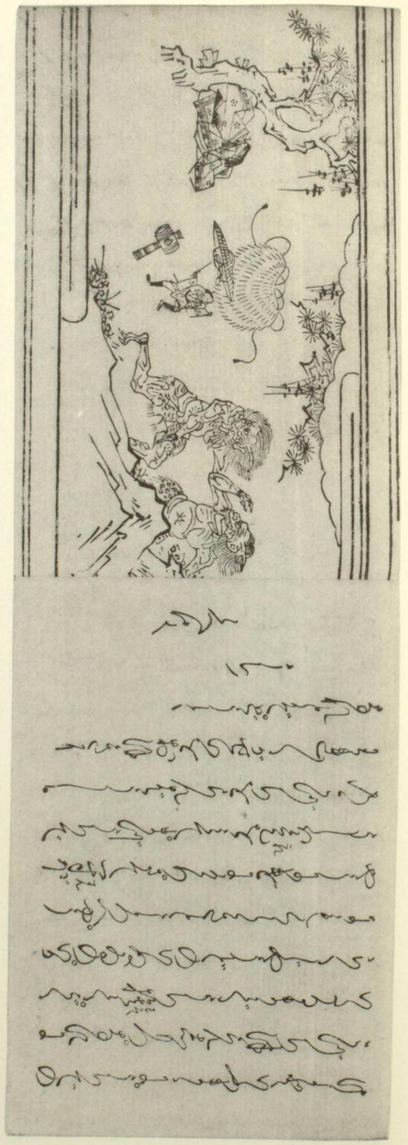
縱一七糎、橫二五糎、奈良繪本、三册。慶長時代を下らぬ書寫、筆者或は女筆であらうか。寫眞は內裏の御遊を、小伏見の許にぬけ出した中將が、月の光にもよほされ、小伏見の琴にあはせて笛を吹き興ずる—後數日に待つ永遠の別離も知らぬげな二人。最も端正な奈良繪の貌である。

二　くまの丶本地

中天竺摩伽陀國大王は、九百九十九人の后達の讒言により、皇太子を姙つた五衰殿の女御を、千疊の松原に殺す。母女御が末期に生れ出た王子は、佛の冥力により、虎狼野犴や死して盡くる事なき亡母の乳房に養はれ、三年をその山中に過し、後高僧に拾はれ、その寺で學問にいそしむ。七歳、召されて王宮中に入り、ここに父子奇特の對面を遂げ、一切の事情を聞いた大王は、せめても亡き人の首に供養するや、又々不思議母は蘇る。かくて親子うちつれ、この世の淨土日本國に渡り、熊野の神々と示現―中世に最も流行した熊野信仰説話である。

縱二八糎、横一八・五糎、丹絲本、三冊。描寫ままに酸鼻にわたり、行文に一種の調子あり、熊野繪解の遺響が感じられる。刊記はないが寛永頃の上梓か。挿繪はこの期の假名草子類に比して數多く、畫面一齣の續きも長短不齊、繪卷をそのまま冊子に仕立てたからであらう。丹黄綠紫の四色を交へた華麗な筆彩は、この種のものとしても上々である。

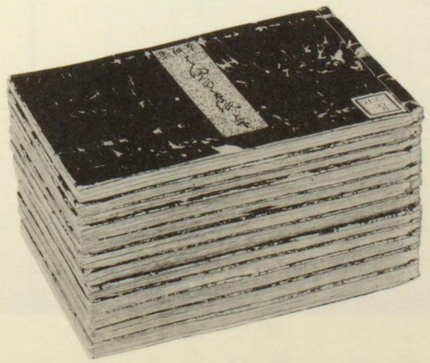




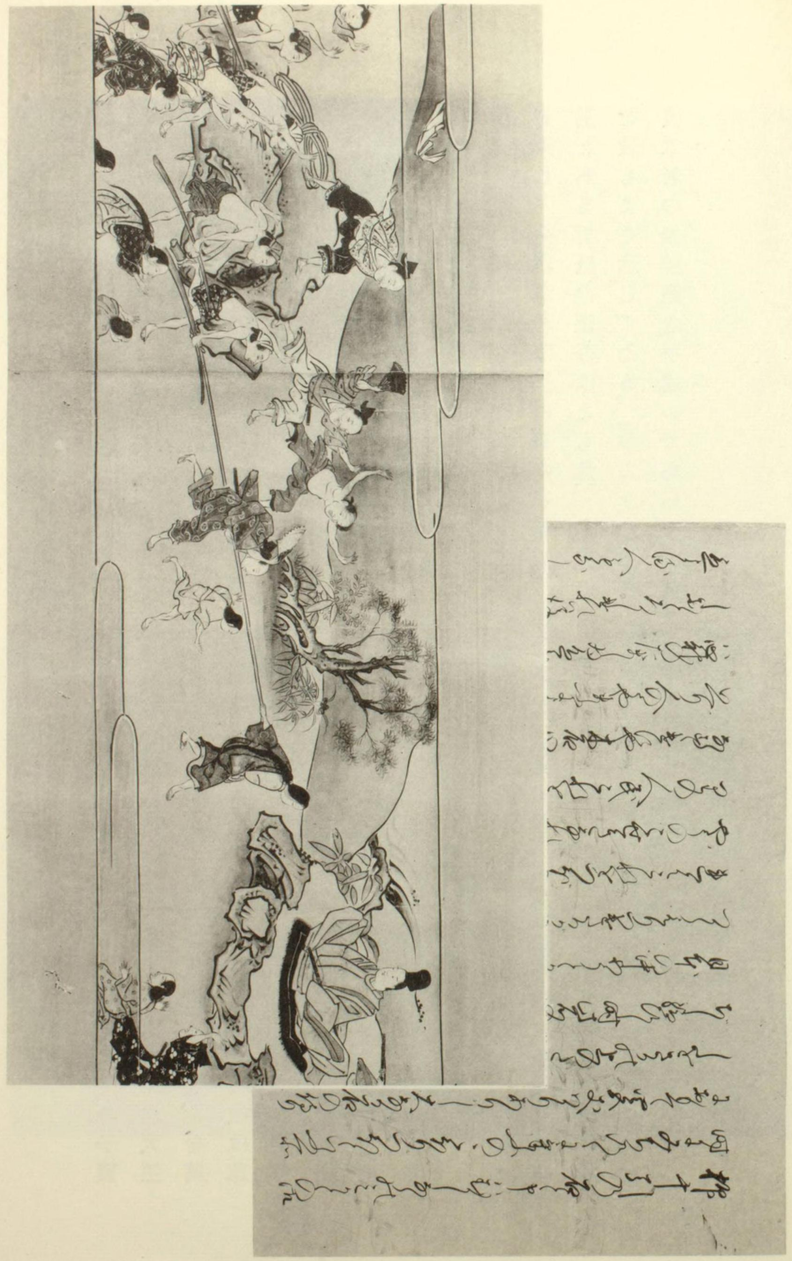
三　御伽草子

文學史上、室町時代小說―廣く文學的讀物をお伽草子といふのは、實は遲く江戸時代からの名稱で、當初は單に物語、或は草子等とよばれてゐた。

一般に室町時代までは寫本、以降を板本期と考へてよからうが、印刷の普及につれ、お伽草子類も次第に刊行されるに至つた。その比較的初期寛永頃は、古活字又は整版の丹緑本形式をとるものも多い。恐らく先行の繪卷、奈良繪本の感覺を襲つた故であらう。次に寛文延寶の交に及んで、美濃版素刷本が主流を占め、遂に單行ではなくて、草子中代表的なもの二十三種を選び、奈良繪本的裝釘による袋綴横本、素刷繪入のものが合輯叢刊されるに至つた。明證を缺くが寛文―享保の刊行といふ。狹義にはこの二十三種本を御伽草子と稱し、いつしか廣く室町時代小說の通稱ともなつた。



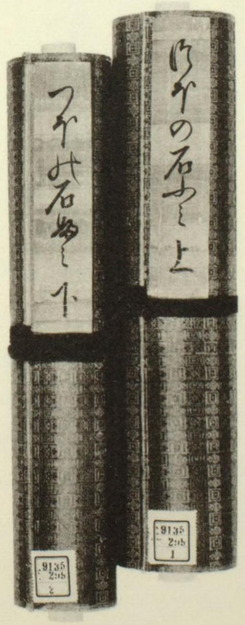
寫眞は横本の一寸法師（上）と酒呑童子（下）。縱一四・五糎、横二二・五糎。

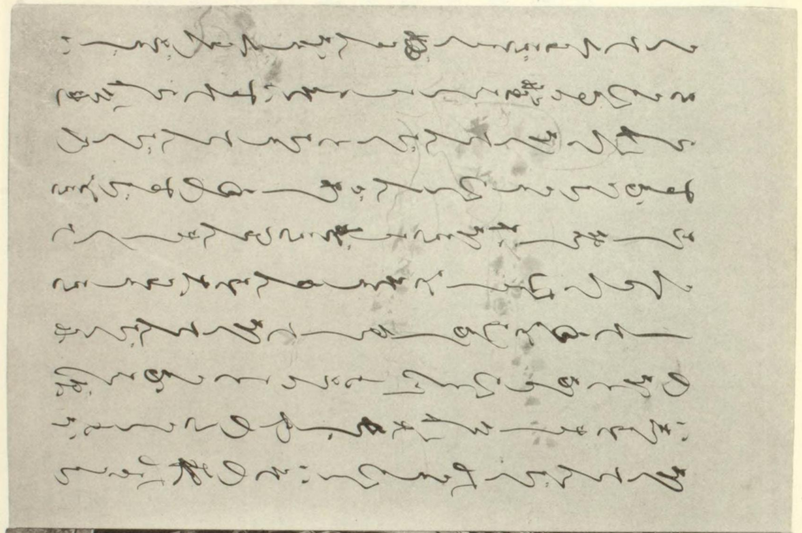


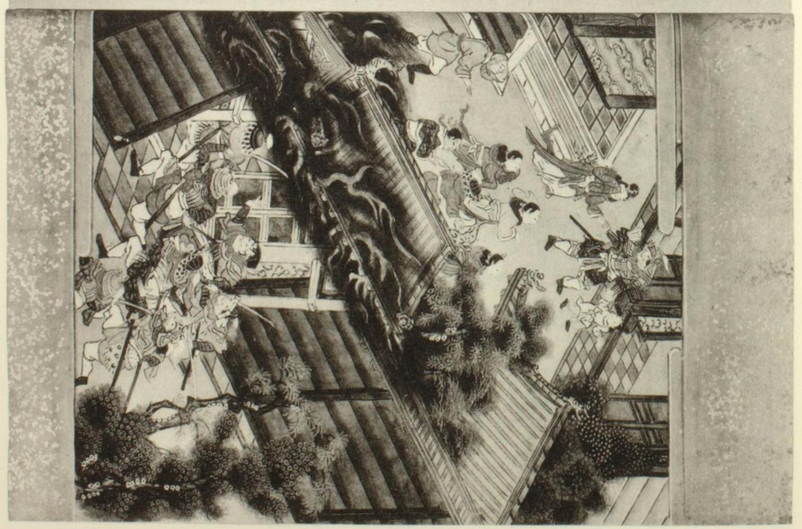
三壺の碑

奈良の帝の御時、陸奥壺の里に、諸人に祟りをなす面四、五丈許りの靈石があり、守護甲斐某は國人を召して國境に移さうとした。時に村里にやもめ住みの美しい女人あり、夜は來れども晝は來ずといつた青狩衣の美青年と深く契り交はしてゐた。石引の前夜、例の青年は、千引きの石も君が引けば動くと豫言して女の許を消えてゆく。實は大石の精であつた。女の引く綱にさしもの大石も、坂を轉ばす樣に動いたのはいふまでもない。後、女は富み榮え、いつしか國司の寵を得て多くの若君も出で來、末いよ〳〵繁昌した事であつた。

縱四二糎、横六一糎、二四枚繼、全長一二米六一糎、同一七繼、全長九米五糎の繪卷物、二卷。金泥草花下繪の鳥の子料紙、金襴表紙、牙軸、頗る豪華であるが、畫趣は奈良繪風よりは土佐末流に近く、却て格調に乏しい。讀物としての實用から離れ、裝飾本に墮落したこの期寛文頃お伽草子の姿、所謂嫁入本の一類である。







一四 寶月童子

中天竺摩迦陀國の滿月長者は、病身なその子寶月童子のため、不老長壽の靈藥を求めて北天竺への旅に上る。北天竺大王の花園には人身を馬相に變えるといふ不思議の靈草があり、彼は草を長者一行に喰せて廐に繫ぎ、長者の家を燒打してその寶を奪つた。辛うじてこの難を逃れ出た童子は、苦難の末敵地に入り、かの靈草を得て父を助け、北天竺大王の首を討つて目出度くなつた。

歸國、功により摩迦陀國の皇太子となつた。

縱三〇糎、横三二糎、奈良繪本、二冊。紺紙金泥繪表紙、題簽は紅短冊形、金箔の見返し、金泥草花下繪の鳥の子料紙。繪狩野蛇足軒山雪、詞書並外題八條殿知仁親王とある折紙の正否はとも角、本來の素朴を離れて艶媚に過ぎた後期奈良繪本の姿を最もよく示してゐる。「おようのあま」とある原題簽も、實は本書には別のもので、裝本者の無神經な手違いであらう。寫眞は寶滿長者邸夜討の場。カットは表紙。

一五　横笛瀧口草子

平家物語が以後の文學藝能界に及ぼした影響は、諸古典中最も大きいものの一つで、材をこの物語に得たお伽草子も少なくはない。建禮門院の女房横笛と、小松内府重盛内の侍齋藤瀧口時頼との悲戀をあつかつた本書も平語中の一齣である。父三條左衞門持頼の反對にあつた瀧口は、孝と戀との惱みから洛西嵯峨の往生院に遁世。風の便にこれを知つた横笛は、一日その庵室の戸を叩く。修道の志の亂されるを憂ひ、使の僧を以て、御尋ねの者は在庵せぬとつれなくも答えさすが、せめて君の一聲なりともとかき口説く横笛の情にほだされ、柴の編戸を隔てて―寫眞は瀧口入道の詠みかける歌を垣越に聞き入る横笛。瀧口入道の動かし難い道心を知つた横笛はその歸るさ、遂に大井の川瀨に身を投げたのである。

縱二五・五糎、横一八・五糎、奈良繪本、一冊。元祿頃の書寫、繪は奈良繪本の世界から逸脫し、全く浮世草子挿繪の風に頽れてしまつてゐる。

納本

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES No. 11.

Otogi-sōshi : Nursery tales of Muromachi-period

Contents

1. Tenjin-no-emaki
2. Nezumi-no-sōshi
3. Kootoko-no-sōshi
4. Iwaya-no-sōshi
5. Kachōfūgetsu-monogatari
6. Shizuka
7. Mokuren-no-sōshi
8. Yahyōe-nezumi
9. Hidakagawa
10. Kofushimi
11. Kumano-no-honji
12. Otogi-zōshi
13. Tsubo-no-ishibumi
14. Hōgetsu-dōji
15. Yokobue-Takiguchi-sōshi

Among the characteristic literary products of the Muromachi-period were the Otogi-zōshi (nursery tales). Intended for the illiterated readers, they were written with uncertain childish strokes and very differed from the works of the former ages. Both of these books and scrolls were usually illustrated and gave the new epoch to the history of illustration. These pictures are full of fantastic elements, and the illuminated books in manuscript are especially called Nara-ehon.

To give a general survey of these, here we present fifteen items in our collection.

善本寫眞集

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES

I 日本近世名家自筆集 (Autographic documents of Edo-period in Japanese literature) 昭和 28

II きりしたん版 (The Jesuit Mission Press in Japan) 昭和 28

III 古俳書 I (Kohaisho-I: Materials of early Haikai) 昭和 29

IV 西洋古版日本地圖集 (Early printed maps and atlases of Japan made in Western countries) 昭和 29

V 開館廿五周年記念稀覯本集 (Collection of old and rare books and manuscripts, the 25 th anniversary volume) 昭和 30

VI 滿文書籍集 (Collection of Manchu books) 昭和 30

VII 近代作家原稿集 (Collection of Autographic MSS of Japanese novelists and poets from Meiji-Taishō periods) 昭和 31

VIII 小泉八雲集 (Lafcadio Hearn) 昭和 31

IX 日本史籍 (Classics of the History of Japan) 昭和 32

X 泰西日本記集 (Early Western works on Japan) 昭和 32

XI お伽草子 (Otogi-zōshi: Nursery tales of Muromachi-period) 昭和 33

XII 獨逸文人自筆集 (Autographs of German literati) 昭和 33

昭和三十三年七月十日 印刷
昭和三十三年七月十五日 發行

編輯者 奈良縣天理市 天理圖書館

印刷者 京都市中京區新町通竹屋町南
株式會社 便利堂

發行者 奈良縣天理市 天理大學出版部